〈臨時増刊〉

高齢化社会をよくする女性の会会報

No.64　1993年5月発行

高齢化社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿２－９－１
第31宮庭マンション802号室
ＴＥＬ.03－3356－3564
ＦＡＸ.03－3355－6427
郵便振替　東京0-79477

―目　次―

セミナーツアー報告② …… 1～10
男・老いを語る㊴原田和明 …… 11
声・未亡人を死語に …… 12
リレー・エッセイ⑧井上治代 …… 13
日本介護福祉学会設立へ向けて …… 14
シリーズ訪問②加藤シヅエ …… 15～16
本の紹介・事務局だより …… 16

■設立一〇周年記念――――――――スウェーデン、アメリカ

「女と老い」をめぐる セミナーツアー報告②

三月二十八、二十九日――ニューヨーク

悩める国、アメリカが抱える高齢化社会の光と影

野口房子

三月二十八日、ストックホルムからニューヨークへ向けて移動。視察と学習からつかの間解放され、機内は窓からグリーンランドの氷の世界を眺める人、ひたすら眠る人と思い思いのときを過ごす。そのうち前の席の方で折り紙講習がはじまる。フィンランド人母娘や他の子ども達と片言の英語や手振りで何とか折鶴が完成、これもうれしい国際交流だった。

予定時間通りニューヨーク・ニューアーク空港着。アメリカはどんな表情で私達を迎えてくれるのだろうか？　空港で働く人の肌の色の多様さから世界一と言われる人種の多さを実感させられ、人々の動きの慌しいのにも驚く。入国手続の窓口ナンバーの指示も早口で聞き取るのに必死、トイレに入れば自動水洗？　に追いたてられ、ストックホルム流ゆっくり気分は切り替えざるをえなくなった。

まずは簡単な市内観光からスタート。街の中心五番街、曇天で上の方は見えなかったエンパイヤーステートビル、はるか彼方の自由の女神。ここだけは治外法権という国連では議会場は見られず、建物内の郵便局でこの中しか通用しない切手を使ってハガキを大急ぎで投函。色とりどりの旗の立つロックフェラーのビル群の谷間の野外スケート場を見てホテル

着。樋口代表、米国のみ参加の方達と合流して夕食。成田との時差をやっと克服したのにまたまた七時間の時差。御馳走より眠りたいなあと思ったのも当り前、私たちの体内時計は真夜中近くであった。

さて二十九日、十階の部屋も窓から見るとビルの谷間、絶え間ないパトカーのサイレンにも落ち着かず、ここでは一泊のみなので荷物も出し、バスで今日の目的地マウント・サイナイ病院へ向かう。病院前に着くと十時近いせいか玄関内は相当の人の流れ、肌の色も様々な人が行き交うのを眺めて案内を待つ。アメリカはどこもセキュリティーが厳しいとかでしっかり連絡がとれるまで待たされ、樋口代表と旧知の方が見えてやっとOK。

一室に通されジュディス・ハウ氏の説明を聞く。この病院は一八五二年ユダヤ系の金持ちが造ったとのこと。日本でいえば聖ルカ病院みたいなもので、ニューヨーク随一の最新設備を持つ医療教育センターである。老人医学部とINC（国際老齢者社会をリードするセンター）があり、彼はその両方の事務局担当とのこと。大学で社会学、老人医療のソーシャルワークの修士課程を修了。アメリカにはみなさんのような「高齢化の会」はないので学びたいと愛想のよい自己紹介。控えていたノーマクリスティーナさんが両部門のニュースを配布してくれた。

十年前に老人医学部ができ、部長はロバート・バトラー氏。全米一二六の大学のうち唯一のもので、①クリニック②教育③研究④政策研究（アメリカ以外も）が柱になっている。INCは三年前の設立で高齢化社会の諸問題を国際的に研究したいと、日本の伊部英雄氏の名も上がった。そしてアメリカでも女性の方が長生きということと私達の団体を意識してか、高齢女性の問題に話は移った。一九六〇年頃には女性の受ける教育は男性を超える程になったが、女性は受けた教育と職業選択の落差を意識しはじめた。女性運動の中でも学問的に男女の差を位置づけていたが、当時運動の中心は若い女性だったのでまずそこに目が向き、やがて年齢が高くなるにつれ健康や医療問題に関心が移っていった。経済的にはまだ女性が弱いが平等のアクセスができ、リブの平等の活動はそれなりの意味があった。

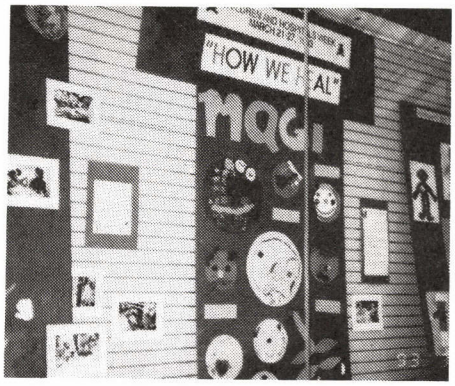
視察バスの前で

これはハッシャー大のシャロット・マーラー教授の話である。通訳を介しての話は理解しづらい部分が多く、リブ運動の中で母性保護が欠落したり、七十年以降の女性の職場進出がめざましい反面家事や介護は女性の肩に重く、賃金格差もまだある現実の話に、まだまだ伺いたいことがあった気がする。「研究」としては①年をとったら仕事をどうするか、INCのプログラムの一環として日本とも提携

したい②高齢化社会年鑑の作成（統計学的に㋑人口動態㋺経済学㋩ヘルスケア㋥社会的文化的）を日本との比較も含め国連の統計局も巻き込み世界三十四カ国のプログラムを作りたいとの構想を話してくれた。

病院内のソーシャルワークについては、スーダン・ブルーメンフィールド教授より「ワーク部があり、すべての患者の年齢、病歴に対応するが老人の部門が多い。内容は患者や家族の入院のショック緩和や回復後の社会復帰の手助け、教育研究がある」と説明。こちらからの質問への答として「一人暮らし老人の手術承諾は本人が基本だが、ダメな時は家族をさがすか病院がOKするが、訴訟の多いアメリカでは病院の対応は複雑」「医療費は六十五歳以上ならメディケア（高齢者医療保険）が保障、六十五歳以下で払えない時はメディケイト（低所得者医療扶助）を使う」「民間ではあるが利益追求の病院でないので、二人部屋は保険で保障され治療に貧富の差は差額ベッド位」という話だったが、クリントン政権の目玉、国民皆保険はどうなるのか。誇る最新設備を見ることはできず残念な思いで病院を出る。

私財を投じて病院や文化施設を作り、非利益ということで税金も安くし、寄付やボランティア精神が盛んという現状は生き方のバックボーンに宗教があるせいか？　それにしても垣間みた活気と高級感あふれる市中心部の市民生活の一方で、ホームレスやハーレムの貧しさは、アメリカの今後の困難と、それを追いかけている日本のあり方まで考えさせられた。とても複雑な気持で雨の高速道をボストンへと向かった。



子どもの作品が展示されているマウント・サイナイ病院ロビー

三月三十日――ボストン

老・幼の共生を目指すボストンのデイケア・センター

宮地敏枝

三月三十日（火曜日）雨、平均気温十度。

ホテルの窓から眺めるボストンの朝は、静かに春の雨に濡れていた。（ちなみに東京のお天気は、晴れから次第に曇り夜には雨。気温は九度）

バスで駆けぬけただけで、ほんの一面だけにしかふれられなかった街ニューヨーク。エネルギーに溢れ、超高層ビルの林立する空のない大都会ニューヨークにくらべ、ボストンはどこか落ち着きがあり、そのたたずまいは都会に特有な喧騒を感じさせない街であった。

ボストンはその昔、メイフラワー号に乗って故国を逃れて来た清教徒の人々によって建設された街。インディペンデントな精神を尊び、個人の自由と尊厳をな

によりも大切に育んできた気質・風土が独立戦争を促し、いち早く奴隷解放の声をあげさせた街。また、街が建設されるとその数年後にはハーバード大学が創立（一六三六年）されたことからも窺えるように、学問の街でもある。

そして現在では学問、文化はもとより工業、水産業の中心地として知られる都市であり、ニューイングランドと呼ばれていることからも分かるように、アメリカ合衆国の人々にとって〝心の故郷〟でもある街、それがボストンである。

七時三十分。ルームメイトと連れだって朝食に行く。成田を発って八日目、そろそろお味噌汁の恋しいころと思いきや、西欧式ブレックファーストの奥にならんでいるのは、焼きのりにお漬物。少々パラつきかげんのご飯と味噌スープ。〝具〟がないなんて贅沢いっちゃいられない。おまけに焼いた鮭までサービスされて、思わずしらず頬がゆるんでしまう。ウエイターさんにもついつい「サンキュー」の声が弾んでいる。われながら現金なものだと、些か端なく思うほどである。

デイケア・センターの運営は企業の支援による

午前中の視察は、A・B・Cの三カ所。各自、希望別にそれぞれのバスに分乗し、目的の施設を訪問することから始まった。

現地の事情に詳しい後藤さんを案内役に、総勢十八名のC班はSTRIDE RITE CORPORATION INTERGENERATIONAL DAY CARE CENTERに向かって出発した。バスは、くすんだ赤煉瓦のアパートメントが立ちならぶ街をぬけてチャールズ川を渡り、マサチューセッツ工科大学の研究室を左右に見て進むうちに到着。

町中の一見なんの変哲もない、ごく普通のビルの四階にデイケア・センターはあった。幼児と老人が集う場所…こうした所には、運動場に砂場やブランコがあり、その周りには花壇が…などと思いこんでいた私には、意外な空間設定であった。

玄関を入った所の壁面に〝THE STRIDE RITE CORPORATION〟と金文字で書かれているように、このセンターはもともと社員用の保育所であったものを拡充し、従業員家族の福祉サービスとして、幼児と高齢者がともに過ごすデイケア・センターとして一九九〇年に発足したと言う。その後、地域のお年寄りや幼児を受け入れ、保育部門＝四クラス五十五人。高齢者部門＝二十四人の各定員を、三十人からなる教職員スタッフによって独自性の高い管理、運営がなされている。

ご馳走になったクッキーが焼かれた調理場は広くて清潔。いかにも使い勝手がよさそうだ。ポートと呼ばれる読書室は陽あたりの良い特等席。お年寄りのお気に入りの場所とか。そのほか娯楽室、食堂、美術工作室などがあり、こうした空

間を目的や用途によって共有し、老・幼両者の共生による豊かなコミュニケーション、社会関係の構築を目指していると言う。

それにしても昨日見た病院といい、このセンターといい、企業からの潤沢な援助によって財源が確保され、独自の運営が保障されているとはいかにも〝アメリカ〟という感じがしてなんとも羨ましいかぎりである。

お昼にはツアー参加者全員揃ってランチ。午後は一堂に会して、ブランダイス大学教授で長期医療保険会社社長でもあるワラック先生のレクチャーと、少しハードなスケジュールである。

講義終了後は見学をとりやめにしてホテルに直行。夜のレセプションまで横になる。

夜はシーフードレストランに、OWL会長をはじめ支部役員の皆さまをお迎えして晩餐会。楽しいひとときを過ごした帰途は雨もあがり星空。宴の余韻もそこそこに、荷づくりを終えてベッドに入る頃はすでにシンデレラであった。

三月三十一日、四月四日――ワシントン

交流を望む老人達。在宅介護への願いは東西変わらない

桑門澪子

三月三十一日、五時半起床。朝焼けのボストンの町、真っ赤な大きな太陽が、ボストン湾から昇ってきた。この古き良き時代のアメリカのたたずまいを色濃く残した憧れの町とも今日でお別れ。七時半にウエストンホテルを出発して、二十五分でローガン国際空港に着く。しばらくの間、ショッピングをしたり手紙を出したりと思い思いに時を過ごして、九時四十分に離陸。十時五十分にダレス国際空港に着陸。この空港は三十年前にジェット機専用の空港として造られたと言う。空港と町をつなぐ専用道路を走ってワシントンに向かう。日本の高速道路と同様に防護壁がある。両側に見える家々は、木立に囲まれて前と後ろに庭を抱えている。赤い煉瓦の家に煙突もみえる。

アメリカ人がアメリカで最も美しい町と誇るこのワシントンは、南はバージニア州、北はメリーランド州に挟まれて、オールドアメリカンの香り豊かな町である。郊外から町に近づいても、ワシントンは自然の美しさや豊かさをそのまま残している。建物の高さを三階までと決めることで、そこに住む人々の心にどれだけ大きなものを与えているか計り知れない。

女性の就業率が、七十%で、全米一と言う。そして、高学歴の人が多く、十六パーセントの人々が大学卒と聞いて驚いた。今一つワシントンでとても印象的なことは黒人の住人が多いこと。八割が黒人と言うことである。町を歩いても、レストランに入っても、それはすぐに納得がいく。ホテルのレストランで、白人のウエイターが黒人の客にサービスをしているのが、とても新鮮だった。このように、白人も黒人も、そして女性も男性も、健常者も身障者も隔てのない世の中になることを願う。

市内をひとまわりして、お昼は中華料理のレストラン、チャイナガーデンで、美味しく頂いた。一時十五分にレストランをあとにして、リンカーン記念館や、ジョージワシントン記念塔を巡りながら、AARPへ向かった。AARPの報告は、他の方が、詳しくなさると思うので、私は四月四日、ワシントンから東京へ向かう飛行機の中で、隣合わせたGatty Shultisさん（四十二歳）から聞いた話をお知らせしたいと思う。

ガティさんは、Northridge Nursing Homeで働いておられる準看護婦さん。彼女の働いているナーシングホームは、四月一日に訪れた、ビヴァリー社のフレデリックナーシングホームと同様に、四つのウイングから成り立っていて、一つのウイングには、六十八人の入居者がおられるとのこと。勤務は三交代で午前七時～午後三時、三時～夜十一時、十一時～午前七時。

全米退職者協会（AARP）の女性活動のレクチャー

ガティさんは、まだ子供さんが小さく、学校から帰って来るときに家にいてやりたいので、いつも午前七時～午後三時の勤務を選んでいるそうだ。母親の思いは万国共通のもののようだ。

彼女がホームに行くのはたいてい早朝六時半。受け持ちは、十一人でほとんど全員がオムツをしており、やはり全員が車椅子を使っているとのこと。ホームに着いたら先ずトイレ、次に服を着て洗顔の世話。七時半から一時間位かけて食事のお世話。二回目の食事の時間は八時半で一応決まった時間に食事を取るそうである。お風呂は週に二～三回。「匂いの無い状態に保つのはとても大変なことだけどそれが一番大切なの。私の所は全然匂わないわ」と誇らしげであった。

彼女の話によると、アメリカのナーシングホームはアルファベットの数ほどグレードが別れていて、ホームに入るときの経済力でどこに入れるかが決まる。そして一旦決まるとお金がなくなっても追い出されることはない。グレードの低いホームはとても臭くてひどい状態である。彼女のホームは毎月三十万円位かかる。そして彼女のホームの老人達でさえも家で死にたいという。しかし在宅はもっとお金がかかる。ターミナルケアのためのホスピスの建設を急いでほしい。老人には話し相手が必要。老人はとても寂しい存在で、家族は殆ど訪ねてこない。老人の話し相手をしてあげたいが時間がない、とのこと。

また意外だったのはアメリカの若い人達も親をナーシングホームに預けることに罪悪感を抱いていると言うことだった。親子の情は古今東西変わらないと言うのが実感。ちなみに、彼女の時給は、八ドル四十セントとのことであった。

四月一日――――――ワシントン

アメリカは、問題を明確にし、行動によって変革する社会

丸林和子

ワシントン二日目。朝から二班にわかれてA班はHeritage Harbor(大型リタイアメントコミュニティ)、そして私はB班に入りBeverly社のナーシングホーム見学に出発する。

八時にホテルを出発。ナーシングホームは、メリーランド州北西六〇マイル（約九〇km）のところにあるということで、片道一時間半を予定。バスの中でJTBの高橋さんから〝アメリカ〟の話あれこれを聞く。アメリカは地方主義、分権主義の国であること。正三角形型の社会構造で圧倒的多数の底辺と極少数のトップの存在。企業による社会活動への寄付の有様、等々。曇り空の下、囲りの樹々は葉を落とし、けむったように林立している。アメリカは落葉樹がほとんどだそうで、いっせいに芽吹く春の美しさは素晴しいとか。

フレデリックナーシングホーム

フレデリックナーシングホームでは、私たちのために〝ようこそフレデリックヘルスケアセンターへ〟と日本語の表札を出して迎えて下さった。主任のアンさんをはじめ数人のスタッフから説明がある。ここは一九八九年一月十五日にオープンした一二〇床のナーシングホームで、長期（七～八割）と短期（二～三割）の入居者があること。リハビリを積極的に行っていること。QC運動を取り入れていて、今月のスローガンは、〝笑顔にむけてもう一歩〟であると言われた。

健康な老人のためのリゾート型コミュニティ

ビバリー社は、一九六三年に三つの病院からスタートして、現在は全米に八五〇カ所以上のナーシングホームと一〇万人以上のスタッフをもつ、民間最大手の企業である。私たちの質問もついつい企業としてのナーシングホーム経営が成り立つかどうかに集中したが、答は成り立つとのことであった。入居者の料金は月三千ドル～四千ドルで、不足分はメディケア、メディケイドから補充する。ここはお金持ちしか入れないホームではないと言われた。ただし、一九九〇年の法改正（OBRAの成立）により介護の基準が厳しくなって、以前より経営は難しいとのことであった。

ホーム内を見学。個室は二人部屋も多くあり、あまり広くはない。しかし清潔できちんとしたたたずまいである。赤いマニキュアをした百一歳の黒人ローズさんと仲良くなった。英語がもっと話せた

ら、どんなにいいだろう……と切に思った。

市内観光

ダートさんのレセプションに行く前に、バスの中から大急ぎで市内観光。ナサ本部、スミソニアン博物館、ナショナルギャラリー、FBIと右と左に見て、ホワイトハウスの写真をパチパチと撮りまくった。街角にビルとヒラリー二人の立て看板がある。その真中に入って肩を組んで一緒に写真に納まるという寸法で、日本の観光地と全く同じ発想なのがおかしかった。

ダートさんのレセプション

ダートさんのレセプションは、「全米高齢者協議会」と表札の掲げられたビルの中の一室であった。ジャスティン・ダート氏は一九九〇年に制定された「障害をもつアメリカ人法」の生みの親である。この日は仕事のためワシントンにはおられないとのことで欠席されたが、夫人のよし子さんが、私たちのために多くの関係者の方々を招かれ、待っていてくださった。よし子さんは我々一行の矢澤敦子さんの実のお姉さんだとのことで驚いた。出席者の中で、スメドレー氏、ダグラス氏、フレミング氏、オークさん、オーエンさんの五人がスピーチをされ、我々の側からは樋口代表がお礼の挨拶をされた。各々が熱のこもったスピーチで、ついつい待ち時間をオーバー。それぞれの方のお話からは、障害者と高齢者と女性、三者が力を合わせて、一人ひとりの人権が尊重され、社会参加が保障される社会、生きがいのある社会をつくっていこうというメッセージがはっきりと受けとめられた。そしてアメリカの人たちは、フレミング博士がいみじくも述べられたように、「問題を明らかにするだけでなく、行動によって変革してきている」のだ。アメリカは〝ボランティアの国〟といわれることの極みをみたおもいであった。

視覚・聴覚障害で車椅子のオーエンさんを囲んで

おもしろかったのは、スメドレー氏とオーエンさんの間でちょっとした論争があったこと。「女性の地位は少しずつあがってきている」というスメドレー氏。「いや、私は彼ほど楽観できぬ。〝男が汚した後、女が片付ける〟という状況はまだまだ変わっていない」というオーエンさん。男と女の役割分担の意識と構造は、一朝一夕に変わらないのはいずれの国も同じだな、と思った。

＊

夜は、（希望者のみ）ジョン・F・ケネディセンターでダンスシアター・オブ・ハーレムのモダンバレーを観た。ほとんどが黒人の踊り手による三幕構成のバレーで、息をのんで観つづけた。

こうして今日もたくさんの発見と出会いを詰め込んで一日が終った。

四月二日――――――ワシントン

街そのものが緑の公園

杉本千代子

モーニングコール七時三十分。カーテンを開けると外は雨。

旅行最終日を迎える今日午前中は、二グループに分かれて訪問、視察。GOODWIN HOUSE WEST（グッドウィン・ハウス・ウエスト）行グループとOLDER WOMEN'S LEAGUE（OWL）（オールダ・ウイメンズ・リーグ）とNATIONAL CITIZENS COALITION FOR NURSING HOME REFORM（NCCNHR）（ナーシング・ホーム・リフォーム市民協議会）行グループに分かれて出発。私はグッドウィン・ハウス・ウエストグループに参加。

グッドウィン・ハウス・ウエストの訓練室で絵を描いているところ（ワシントン）

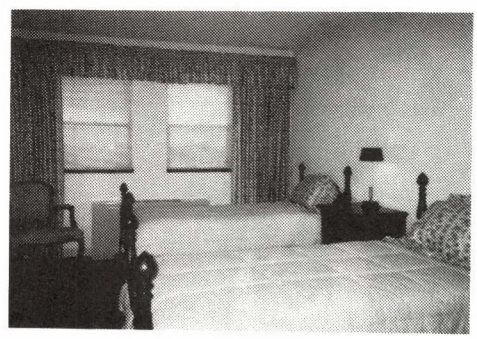
雨模様の中、一八人の参加者を乗せバスは走る。通訳のAKIKOさんが「りんごの花が咲きはじめています」と、ワシントンの春の訪れから紹介。しかし、両サイドの風景は残念ながら薄い灰色に包まれている。桜の花はまだほとんど固い蕾であったが、一部の場所ではちらほら咲いており、その違いにビックリ。

立派な住宅ビルやTVセンターを眺めながら、〝街そのものが緑の公園〟という印象を重ねつつ、九時四十五分GHWに到着。

グッドウィン・ハウス・ウエスト

一二階建て、レンガ色、窓枠は白の建物。まわりは緑の芝生。

ミーティングルームに全員案内され、ターミナルケアハウスであるGHWの概要を聞く。



グッドウィン・ハウス・ウエストのナーシングホーム（2人部屋）

設置主体は、入居中の高齢者と、聖公会からの経済的支援のもとに運営されている団体で、入居者の多くは自家を売って入居している。社会的階級では上位二〇%しか、このハウスには入居することができないとか。彼等は終身の生活をここで送ることが可能であり、入居状況を見ると、活気の感じられる雰囲気であった。施設内見学を十一時二十分に終り、元のミーティングルームに戻って、Mr.

David N.Burke（Assistant Manager）他スタッフ達と意見交換。

このハウスを訪問して、日本も高齢者が主体的に入居したくなる施設造りを推進する必要性を感じた。

十二時十五分専用バスに全員乗りこみ、北西から南東にゆったりと流れるポトマック川に沿って走り、十二時三十分に次の訪問先に到着。

WOMAN'S NATIONAL DEMOCRATIC CLUB

ここで他のグループと一緒になり、全員揃う。

このクラブでは、すでにOlder Women's League(OWL)と、National Citizens' for Nursing Home Reform（NCCNHR）が、例会を開催中。その会場へ私達が後から合流し、ともにランチを食べながら、プレゼンテーションを受けた。白人ばかりというのが印象的であった。

CHERYL LADDさんの講演

彼女は女優であるが、自身の幸せだった子ども時代を感謝する志からこのような会に参加し、講師としてボランティア活動を行っている人である。

内容は、最近増えつつある子ども虐待の事実と、子どもがいかに心理的に損傷をこうむるか等を具体的に、熱弁をふるわれた。子どもにとって、環境の安全と保護がいかに重要であるかということ、特に幼児期の子どもを持つ親の役割は、何にも替え難いと強調された。十四時二十分WNDCを出発。

最後の夜のお別れ会

十九時、THE WASHINGTON HILTON & TOWERSのGEORGETOWN ROOMにて、当会主催のお別れ会が開催された。ジャスティン・ダート氏やOWLの代表数名、ワシントン視察関係者が招かれた。

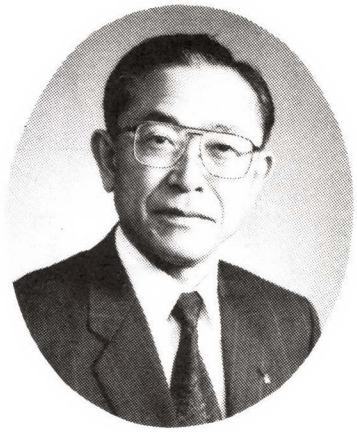
最後の夜のお別れ会で……。

進行役は、松村満美子氏。最初に、私達を代表して、樋口恵子団長があいさつし、関係者各位に感謝の意を述べられた。

ダートさんからも、激励のことばを受け、OWLのルース・ネイデルさんから、樋口恵子団長へテープがプレゼントされた。

ここで乾杯。音頭取りは、ダートさん。料理・飲物等は、バイキング形式。一〇人ごとの円テーブルに分かれて、楽しく最後の夜を全員で過ごした。

ハードなスケジュールをこなし、
帰国前のひととき



人は、歳月と共に老いるのではない

── サミエル・ウルマンの詩を座右の銘に ──

原田和明（はらだかずあき）

1931年、東京都生まれ。東京大学経済学部卒。現在、株式会社・三和総合研究所取締役副社長。

九三年一月、米国大統領に就いたクリントンは、その短い就任演説の中で、国民に対して、米国を更生させるため change（意識と行動の変革）と sacrifice（自己犠牲）を繰り返し訴えた。この就任演説は、その後の世論調査によると、八割近い国民の支持、共鳴を得ている。私は、若いクリントンの下で、アメリカン・ドリームが復活し、経済の再生する可能性は高まった、と展望している。

ところで、満州事変の年に生まれた私は、昔流に言えば還暦を超えてしまった。年月のたつのは何と早いことか、改めて感無量の心境になる。

しかし、幸か不幸か、激動する国際情勢に振り回されている私にとっては、じっくりと過ぎし日々を懐旧の念で想い出すような時間がない。むしろ、クリントンの下で、大きく変わろうとしているアメリカをみていると、いぜん島国根性や小国意識から抜け出せない我々日本人こそ、米国以上に change が必要だと痛感させられている昨今である。

新しい時代への意識変革や挑戦心では、私は若い人達に負けないつもりだが、むろん、それが独りよがりであってはならない。この点、私が自戒と反省の座右の銘としているのが、幻の詩人、サミエル・ウルマンの〝青春という名の詩〟である。

「若さとは人生のある時期のことではなく、心のあり方のことだ。若くあるためには、強い意志力と優れた構想力、激しい情熱が必要であり、小心を圧する勇気と易きにつこうとする心を叱咤する冒険への希求がなければならない。人は歳月と共に老いるのではない。理想を失った時、老いるのである」

何と感動的な詩ではないか。確かに人間は年月を重ねることで老いるのではないと思う。心の持ちようによって、三十代、四十代でも時代の変化に適応できず、老いている人々も少なくない。年など意識せず、一度しかない人生、一日一日を充実感をもって生きてゆくこと自体、幸せな人生であり、青春の持続なのだと思う。

ウルマンの詩は次の言葉で結ばれている。「人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる」と。

投書

「未亡人」を死語に

大石 富士子

差別用語が問題になってから久しくなります。

障害者への言葉はずいぶん訂正されました。夫の呼び方は様々に検討中ですが、少しも問題にされないものに「未亡人」があります。

「まだ亡くならない人」とは「主人」に対する主従などよりもひどい差別だと思います。「人」は男女共用ですが、妻を亡くした男性には使いません。

殉死の時代でもないのに、生きていては申し訳ないのでしょうか？

日本語研究者、遠藤織枝氏の著書『気になる言葉』の中にも「未亡人」が出ていますが、残酷でさえあると書かれています。日本語を学ぶ外国人から「夫亡人の間違いではありませんか？」と質問されたそうです。

従来の寡婦、やもめ、後家等の中で「夫亡き後、子どもを抱えて苦労しながら家を守っている」と言う意味で、後家が一番理に叶っていると思いますが、たいていはからかい半分に使われています。

川柳に至っては書くのをはばかるような使われ方をしています。

何かの記事にする時、夫の名が必要な場合は〇〇氏未亡人ではなく故〇〇氏夫人でよいのではないでしょうか。

先進国のWIDOW, VEUVE, WITWEにもまだ死なないという意味はなく単なる名詞です。同じ先進国であるはずの日本にまだ殉死の影を背負った言葉が日常使われているのは恥ずかしくはありませんか？

障害者用語の場合は彼等自身の強力なつき上げがありましたから訂正されたのです。「夫」の場合も女性自身が問題にして検討しています。

全女性の中の少数だからかも知れませんが、何故未亡人自身が言い出さないのでしょうか？ いまさら「大和撫子のつつましさ」でもありますまい？

他の人からの訂正を待っていては駄目です。皆でよい名前を考えようではありませんか？

まず新聞紙上から「未亡人」を死語にしたいものですね。私の生きているうちに（八十二歳）。

この投書から、新聞での「未亡人」という言葉の扱い方はどうなっているのか、三大紙と地方紙の数社に尋ねてみた。

ほとんどの新聞社が「故〇〇氏の妻、故〇〇氏夫人」というように、他の呼び方を工夫し気をつけているが、何も考えずに使っているという返答の社もあった。

また、週刊誌や雑誌などでは、結構目にすることが多いとの声も聞くのだが―。

我が家は、伝統的な役割を演じない家族

ノンフィクション作家
井上治代

我が家には四人の家族が暮らしていた。四人で戸籍が三つ、住民票が三つある。私の実父が一つ、連れ合いが一つ、私と息子で一つ。三世代が共同生活をしているのだ。

誰かが誰かの戸籍や住民票に入って、戸籍筆頭者や世帯主に従属・吸収されるのではなく、大人はみな対等だ。

簡単にいえば、婿とか嫁とか舅とか、そういった身分関係をいっさい持たない共同生活者が家族である。

それは手続き上だけではない。三人の大人は生活費を等分に出し合い、家事も平等に行っている。父は定年退職しているが、かなりの年金をもらっているし、母が病気で倒れたときから、介護にあたった私の交代要員として、ある程度の家事をマスターした。それまで何もできなかった父だが、そのとき覚えた家事は今でも続けている。

人間の子が一人しかいないが、その分？猫が二匹いる。一匹は私の姓で、もう一匹は連れ合いの姓をなのっている。やがて法制化されるであろう夫婦別姓の場合の「子の姓」を意識したわけではないが、ごく自然な感情から一匹ずつ違った姓がついた。

この四月、同居の実父（七三歳）が入院した。腹部に直径六センチをこえる動脈瘤ができ、その手術のためだ。同居人が一人減ったと思っていたら、一八歳になる甥が荷物をまとめてやって来た。わが家から予備校に通いたいというのだ。

食生活や生活習慣の違う家族が一人増えるということは、簡単なことではないが、どこまでやれるのか試してみたい。

連れ合いと子供には血縁関係がなく、そこへもってきてもう一人、血縁関係のない青年が家族に加わった。伝統的な役割を演じない寄り集まり家族が、本当にうまく暮らせるのか、試してみたいと思う。

こんなふうに私が二階で原稿を書いていると、下から何やらおいしい匂いがしてきた。甥が夕食を作っているのだ。

我が家の家族になるには、血縁は必要条件でないが、家事ができなくてはだめだ。甥は、私から渡された三冊の料理の本とともに奮闘中である。

青年たちはやがて巣立っていく。そのときこの体験は、同世代の仲間との老後の住まい方や、助け合いに役立てるのかなあ、などとぼんやり思ってみる今日このごろ、どうやら父も退院して帰ってきそうだ。

＊

（次回は角田由紀子さんにお願いします）

★一九九三・四・二九

日本介護福祉学会設立へ向けて

――設立準備研究集会報告――

日本介護福祉学会設立準備委員　井上千津子

高齢化社会へ急速に突入した現在、介護問題が国民的課題になっています。こうした背景の中で、介護職の質と量の確保が必須条件となり、この条件を満たす方法として、一九八七年に介護福祉士資格が法制化され、ホームヘルパーや施設に働く寮母職に、介護福祉士という国家資格が付与されることになったのです。すでに全国で三万人近くの介護福祉士が誕生し、老人・障害者の福祉施設や、在宅において介護にたずさわっています。

介護とは、その人の命を守り、生きる意欲をひき出し、高めることを目標とした仕事です。従って介護福祉士は、その人の心にふれ、生活の内面を観察し、その人の生き方を支える役割を担うわけです。

このように介護福祉士の果たすべき役割も、また寄せる期待も大きいわけですが、介護の領域においては、確立された理論体系や技術体系は、いまだ未成熟であることも事実です。

老いたる者、病めたる者の人権を座標軸にすえ、実践の中から理論体系と技術体系を構築し、さらに実践学としての、学問を確立することが急務です。このことこそ、介護の質の高まりにつながり、私達の老後の生活の質を保障することに結びつくものと考えられます。

こうした思いから昨年末、有志の者が集まり（準備会代表・一番ヶ瀬康子先生）、介護の実践者、研究者、教育者、学者、介護に関心のある方々に呼びかけ、一二五名の発起人のもとで、日本介護福祉学会設立へ向けて準備がすすめられてきました。

去る四月二十九日、（東京・安田火災海上保険会社）介護福祉学の課題と方法を探り合うことをテーマとして、「日本介護福祉学会設立準備研究集会」が開かれました。当日は五百有余名の参加者が会場を埋めつくし、介護に対する関心の高さ強さを示したのです。

内容としては、一番ヶ瀬康子先生が、介護の独自性と専門性について、さらに学会設立の意味について、基調講演を行いました。

また、シンポジウムでは、樋口恵子、亀山幸吉、加瀬裕子各先生より、それぞれ発題が行われ、それに対してコメンテーターの、岡本千秋、京極高宣、鎌田ケイ子、田中由紀子各先生方が意見を述べました。

参加者は、介護福祉学会設立へ向けて、熱い思いと期待を共感したのではないでしょうか。

日本介護福祉学会設立総会と第一回大会は十月二十三日、日本女子大学（東京・目白）において開催される予定です。

介護を自分の問題としてとらえ考える大会に、多くの皆さんの参加をお待ちしております。

なお、発起人として、樋口恵子、袖井孝子、沖藤典子、高見澤たか子、黒田輝政各先生方のご協力をいただいておりますことを申しそえます。

シリーズ訪問②

加藤シヅエさん、晴れやかな九十六歳！
入院で確認した「生きる喜び」

樋口恵子

ことしの新春早々、加藤シヅエ先生のご自宅をお訪ねした。一月下旬、日本テレビ系で放映された「対談・二十一世紀」の撮影のためである。

加藤シヅエさんは昨年九月の夜、ひとりでいるときにバタリと倒れ、腰骨を折った。入院してセラミックの人工骨を入れる大手術、三カ月の入院、リハビリに励んで退院されたばかりであった。それまで入院も病気も知らない丈夫な方とはいえ、九十五歳のご高齢である。「これで寝たきりでは……」と思った人も少なくあるまい。それにしても、九十五歳で初の大手術を受ける決心をよくされたものと思う。

加藤シヅエさん（『風に向かって生きた女たち』より転載）

「ええ、それはすぐに決めました。医師がベッドに寝たきりにならず、少しでも動いてお役に立てるには、手術したほうがいいと言われましたので」

加藤さんの好奇心は入院中の三カ月間も旺盛であった。入院した病院の場所が、生まれ育った環境に近く、比較的昔の風景が残っていたのもよかった。加藤さんは、この入院体験を通して「高齢者が住み慣れた環境から切り離されないこと」の大切さを、あらためて痛感したという。

「生きる喜び」についても考えた。

「よいお世話をされているだけでなく、自分の欲望を充足させるということでなく、その日その日、何か新しいことを知り、自分自身についても人の心についても新しい発見をしていくこと」。それが加藤さんの確認した「生きる喜び」である。

高齢者の生き方について、加藤さんは三つの提案をしている。一つはトイレなど、できるだけ自分でできるような住宅の条件を整えること、第二に、大きな建物でなくてよい、街角の店先にでも高齢者が集まってはおしゃべりする場所がほしい。第三に自分の人生をふり返ってよい思い出、楽しかったことを思い出し、人生を肯定的に生きること。

加藤さんは「おばあちゃん」と呼ばれることに対して、おもしろいエピソードをご紹介下さった。

ある日、外出してタクシーに乗ったら、若い運転手さんが「おばあちゃん」「おばあちゃん」と連発する。加藤さんは、車が自宅に着いて料金を払うときに静かに言った。

「あなたは私の孫ではないのですから、おばあちゃんて言わないほうがいいと思いますよ」。

運転手さんは、それじゃ、どう呼んだらいいのか、と尋ねた。

「こういう場合は、いいことばがあるじゃありませんか。お客さん、て呼べばいいと思います」。

運転手さんは、「あゝそうか、そう呼べばいいのか」ととても素直に納得して別れたという。こう言う場合、喧嘩にもならず、相手を説得できるのは、加藤さんのお人柄と実力であろう。ちなみに加藤さんは一人の小学生の「おばあさま」である。

三月三日、加藤シヅエさんは、秋山ちえ子さんの放送一万回記念の集いに参加してスピーチをされた。前日、誕生日を迎えたばかりの九十六歳である。加藤シヅエさん、秋山ちえ子さん、お二人を前に、私たちは女の生き方のすばらしいモデルを持つ幸せに浸ったのだった。

秋山ちえ子さんの放送１万回記念の集いに参加された、加藤シヅエさんと樋口代表

加藤シヅエさんも登場の『風に向かって生きた女たち』ただ今、好評発売中。お近くの書店か当会事務局までお申込下さい。

『在宅高齢者のサービスニーズと消費者問題』（調査報告書）

（国民生活センター刊　八〇〇円）

八〇歳をすぎても、身の回りのことを自分でできる高齢者は、お金の管理も自分か配偶者がしています。でもいつかはできなくなる日が来るかもしれません。

シルバー人材センターで働く約千人の高齢者を対象に、①金融サービスの利用実態と被害の状況、身の回りのことが不自由になったときの金銭や財産管理の問題　②食事サービスへの消費者としての希望　③介護を受けるようになったときの心配、どこで誰に介護してもらうつもりか　④相続意識等を調査しています。

妻・娘・嫁に頼ろうとする男性と、家族依存の介護のつらさを知る女性の差が顕著に現れています。

※申し込みは、ハガキに「高齢者ニーズ調査希望」とお書きのうえ、国民生活センター調査研究部（〒一〇八　東京都港区高輪三―一三―二二）へ。報告書と振込票をお送りします。一〇四〇円（送料込み）をお振り込みください。

事務局だより

〝日本列島みな青葉〟の好季節。いかがお過ごしですか。事務局は総会前のあわただしさに〝身も細る〟のは思いだけという悲哀の中にいます。

早速に会費のお振込みをいただき、ありがとうございました。

△当会初の観劇会「姥ざかり」ですが、お申込は直接、関西芸術座となります。

総見日には、樋口代表はじめ運営委員がズラリ並んで、舞台以上に華やかに賑やかになるのではと、もっぱらの噂です。皆さまもご一緒に〝歌子はん〟気分に浸りませんか。前評判上々とのことです。お早目にお申込ください。

△『有料老人ホームQ&A』の刊行も間近ですが、有料老人ホームでどこまで介護が可能なのか、高級なホームでも、特殊ベルトで縛られるなど、〝お金があればなんとか安心日本の老後〟路線も危うくなってきました。

△総会出・欠ハガキがまだお手もとにありましたら、至急ご投函ください。

（新井倭久子）